（第3種郵便物認可）

読売俳壇

矢島渚男 選

西瓜採るラグビーのごとパスつなぎ　富士見市　阿部　泰夫

【評】西瓜畑で、たくさんの人たちが西瓜をポンポンと投げては受け取り、トラックまで運んでいた。まるで折からのラグビーのようだ。面白い光景で見たくなる。

荒ぶるや火の粉も人も筒花火　茨木市　安藤三千男

【評】プロの花火師の上げる花火ではなく伝統の手作り花火。かなり太い筒を手に持って火をつける。火の粉をかぶりながら勇壮なものだ。

新涼に赤提灯の灯りけり　松山市　高山　洋子

【評】これは淡々とした景色である。この頃は仕事帰りと日暮れの時間が重なってきて、庶民的飲み屋の赤提灯に灯が入り誘惑する。

飛び入りて水かけ神輿清め水　立川市　五百蔵英子

空蟬よ脱皮に痛みありますか　山形県　沼沢さとみ

衣服みな脂にまみれて煙草干す　東京都　松永　京子

流灯に平和の文字の次々と　宇都宮市　大門とよ子

中空に上弦の月処暑の雲　羽村市　竹田　元子

黒猫と共に街行く夏の夜　奈良市　浦城　亮祐

終戦日夢に焼かれた日記帳　宇都宮市　吉田　宏

宇多喜代子 選

同じこと何度も思ふ夜長かな　八王子市　梅沢　春雄

【評】まず、こんなことわたしにもあるある、と思わせる句だ。秋の夜長、考えても考えても埒が明かないことをまた考える。

揚花火水面に写り水に消ゆ　埼玉県　竹本　遊児

【評】揚げ花火を見上げているはずの作者の視線は下に向いている。天上の花火ならぬ水面に写った花火を見ている。そんな視点がおもしろい。

美しい残暑の匂ひ過疎の村　東京都　山内　健治

【評】残暑を美しいと見た句。滅びゆくものの美しさか。村人の少ない過疎の村もまた衰退の美しさを見せている。盛夏のあとの村の佇まいである。

野の草も野に吹く風も秋めいて　神戸市　高橋　和郎

秋の浜少年と犬点景に　武蔵野市　相坂　康

稲架続く鳥海山の裾野かな　日南市　宮田　隆雄

右左行ったり来たり赤とんぼ　横浜市　井上　誠一

缶蹴りの夕焼とともに終りけり　土浦市　今泉　準一

秋麗ガラスの海洋博物館　神戸市　吉野　勝子

初秋や空き家に猫の通ひみち　浜松市　木通　佳子

正木ゆう子 選

ふたりただミルクの膜を掬ふ秋　川越市　益子さとし

【評】話をするでもなく、ちょっと温めすぎた朝の牛乳の膜を掬う。各々のカップに膜が張っているのは、電子レンジで温めたからか。つまらなそうで、幸せそうな句だ。

絵みたいな入道雲よ友の死よ　八王子市　中野美保子

【評】あっけらかんとした表現に、まさか・うそ・信じられない、といった気持が、逆説のように滲み出ている。言葉とは不思議なものである。

団扇手に大団円の自給論　笠間市　沢崎だるま

【評】冷房じゃなくて、団扇。それでも凌げる緑豊かな地なのだ。自給自足という夢を語り合えば、広がる明日。既に実現している作者だろう。

緑児のむんず馬追見せに来ぬ　相模原市　荒井　篤

おそらくは真夜中に咲く曼珠沙華　たつの市　七條　章子

妻と言ふ不思議な人と今年酒　加古川市　東田　強

ありがとうもさよならもなき星月夜　松戸市　島田　忠巳

カマキリのあれっ何だっけという素振り　南房総市　山根　徳一

育てたる時計草の実召し上がれ　下田市　森本　幸平

おはやうの声新涼の高さあり　上尾市　中野　博夫

小澤　實 選

地に足が吸ひ込まれゆく秋の暮　甲府市　村田　一広

【評】秋の夕暮れの闇の到来の速さ、闇の濃さを、足という身体の一部を通して、みごとに表現している。たしかに、秋の暮とは、ある意味恐ろしい時間である。

電話詐欺見破る妻や秋涼し　長野県　村田　実

【評】お手柄の妻である。もし作者が電話に出ていたら、だまされていたかもしれない。「秋涼し」に妻を讃える思いがひそんでいる。

外来の藻のはびこれる秋暑かな　宝塚市　広田　祝世

【評】秋になっても暑さが続き、池には藻が繁茂している。それも外来の藻であるというのが、さらに暑苦しさを感じさせるのだ。

つくづくと己が跣を眺めけり　東京都　杉中　元敏

秋風や牧羊犬は長毛種　対馬市　神宮　斉之

録画みな消してテレビや涼新た　海老名市　山田　山人

終戦日吾にも戦闘帽時代　東京都　望月　清彦

秋出水ねずみが泳ぐ通し土間　名古屋市　可知　豊親

落鮎の腹子とびだす炭火かな　津　市　中山　道春

誕生も死もこの茶の間祖父の秋　宝塚市　藤田　晋一

枝しおり 折

小川晴子句集『楢明り』　「今日の花」主宰の第4句集。祖母・中村汀女、母・小川濤美子と3代続く女性主宰がのびやかに四季を詠む。

〈母の文読む祖母正座楢明り〉

（KADOKAWA、2970円）

岸本尚毅監修、西原天気編『音数で引く俳句歳時記・秋』　春・夏に続く最新刊。2音の「秋」から始まる実作の手引。（草思社、1760円）

土井礼一郎歌集『義弟全史』　「かばん」会員の第1歌集。戦争の影が見え隠れするどこか不穏な世界。世の「義弟」たちの行く末を案じる。

〈ひからびた義弟たちを折りたたむしごとさ　驚くよ、軽すぎて〉

（短歌研究社、1980円）

佐々木漕歌集『天飛む』　「未来」会員の第1歌集。50代で短歌を始めた。会社勤めにも詩があり、現代を映し出す。〈ペンキ剝げし西武遊園地鹹くしてここからわれは持久戦に入る〉（現代短歌社、2750円）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭